

# 子どもの人間像形成と人間関係

——幼児期における道徳教育、その前にあるもの——

室 谷 幸 吉



くことは不可能に近い。不可能でないまでも至難に近い。

私たち、日々、複雑な人間関係の中で生活している。そしてその複雑さは、日を追つて増すことはあっても、縮少することはないようである。  
人間関係における社会性の増大が、いやおうなしに、私たちを、人と人とのからみあいのフィールドに追いこむのだ。  
おとなにおいてそうであるように、子どもたちの側においても、事情はまったくかわらないのである。

人間接触の複雑さ、そしてそこに生ずる相互影響の複雑さこそ、ことどもらの人間形成にたずさわる教師として、また父母として、重視しなければならぬ問題である。

人間が、どのような機会に、どのような人から、どのような影響をうけるかは予測できない。そういうことをあらかじめ計算してお

つまり、このことは、つきのような事がらを私たちに教えてくれる。

「人間と人間との交渉・接触のあらゆる場面において、細心な注意を、その相互影響の上に払わねばならない。」

「子どもを望ましく、りっぱな人間に形成するためには、子どもには、良好な人間接觸の機会を、努めて、豊富に与えるように心がけなさい。」

このことをウラ返すと、

「好ましからざる接觸、つまり悪い人間関係には、できるだけ子どもを近づけないように……できるならば、あらゆる劣悪な人間関係から、子どもを隔離・断絶し得るとしたならば、その道をこそ選ぶべきだ。」

ということになる。

昭和二十何年かの夏、めぐろで、おにいちゃんが、やおやに

大きなすいかをかいにいった。

かえりに、こうばんの前をとおったとき、おまわりさんが「ほほう、えらいね」といつて、すいかをうちまでもってきてくれました。

すいかが早くとどいたので「うれしいな」と思いました。  
（六才・男）

善意にみちた、人間の行動にふれたとき、子どもは、その善意

にふさわしい、玉のように輝きのある人間像を己が心中につくりあげる。そしてそういう望ましい、いわば神に近い人間像を、しばしば描きもつことによって、ゆるぐことのない、消えない、たしかな人間像を、身のうち・心の中・胸の底に彫りつける。

人間および人間性への深い信頼、人生や生命の喜びにみちた肯定などは、そういう状態を通して身につくものなのである。

そこまでいけば教育の使命は終つたといつてもアヤマリではない。

「非常にたしかな『人生の勝利者』を生みだすこと」——それが教育の目的であり、使命ともいえるからだ。

すべての子どもが、物心つくいたいけな頃から、いや誕生の瞬間から、あたたかく、ゆたかな人間の善意ばかりに包まれて、生育していくことが可能であるとしたら、これはなんとすばらしいことだろう。

児童憲章には、

「児童は、人として尊ばれる。児童は、社会の一員として重んぜられる。児童は、よい環境のなかで育てられる。」とし、

「一、すべての児童は、心身ともに健やかに生まれ、育てられ、その生活は保障される。」また、

「三、すべての児童は、適当な栄養と住居と被服が与えられ、また、疾病と灾害からまもられる。」

「九、すべての児童は、よい遊び場と文化財を用意され、わるい環

境からまもられる。

「十二、すべての児童は、愛とまことによつて結ばれ、よい国民として人類の平和と文化に貢献するように、みちびかれる。」

こうたわれているが、現実は、その美しいコトバとはあまりにもほど遠く、みじめに汚れており傷多いものであることを私たちはしている。しかし、またそれだからこそ、われわれの努力は高く買われねばならないことになるのだ。私たちの『明日への仕事』が、強く強く期待される理由も生ずるのだ。

人間の善意にみちた、かがやく行為にふれることができ、子どもの腹深く、人間としての徳性を培い、道徳的な骨格を形成するのだ。これこそ、りっぱな人間を生みだし、みがいてゆく上で絶対的な基本的要件であり、德育の根幹をなすものなのである。そして、そういう方向をもつた努力というものが、こんにち、必ずしも万全とは言えないようだ。

人間の善意にふれさせることによって、子どもを陽性化し、強い人間性（ヒューマニティ）の持ち主にしなさい。——私は、確信をもつて、世の教師と父母たちに、このことばをおくる。

子どもらは、大小さまざまの人間的悪意にふれて、徐々に、する賢くなり危険になる。

暗い経験やゆがんだ人間接触を、できるだけ減らして、明かるい経験や善意にみちた人間接触をふやすことに努力する——ここにこ

そ人生ないし教育の真意義があることを忘れてはならない。

人間の善意を集積して作りあげられる人間像は、肯定的であつて、きわめて明かるい。だからそれは、否定的・対抗的・反抗的・抵抗的な人間像とは相容れないものがある。あらゆる自殺（厭世）や他殺（戦争）などは、この種の肯定的人間像から派生し、しみ出していくはずはないのだ。

人生を生きぬく道すじで、このように明かるいシンの通った人間像をつかみ得たものこそ、眞の『強い人』というべきだろう。私たちは、子どもをほんとうの強者に仕立てあげるよう努めているのだといえる。

おにんぎょうさんのたんすをかいにいったとき、バスにのろうとしたら、よそのおねえさんが、入口のとこからいそいでとびだしていきました。そのとき、ちょうどわたしが、入口の前のとこにいたので、ぶつかってしましました。その人はいそいでいるらしく、かけながら「ごめんなさい」といました。わたしは「えらいな」と思いました。（八才・女）

じてんしゃであそびにいったとき、よその小さい女の子がころびました。よそのおじさんがたたせてあげていた。そのおじさんは「おうちでアカチンをつけてもらいたいな」といつていました。

（六才・女）

子どもは、人のコトバのあたたかさや冷たさを通して、その人の心のあたたかさや冷たさを敏感にキャッチしている。子どもは決して鈍感なものではなく、無関心なものでもない。つめたいコトバにふれるとき、子どもは厭惡を感じ反発の姿勢を示す。冷いコトバの使い手に対し、その人の心をケイベツする。人間に対する不信や憎悪の根が、こうして徐々に形成されていく。

ぼくの家の前にきて「この家に五年と二年の子がいるはずだ」なんてどなるへんな男の人がいます。その人は家用があるのではないのです。しらない人です。だから家ではきみがわるくてかなわない。

(七才・男)

善意にみちたあたたかいコトバで子どもの心を包んでやろう。うるわしい精神の礎地を培うために、私たちはあたたかいコトバを使い惜しんではならない。あたたかいコトバ・親切なコトバが、明かるい明日に期待をつながるものだから……。

わたしが、本を見たいなと思つていたら、その本を、「みないよ。みてもいいわ」といつてミッちゃんがみせてくれました。ミッちゃんはしんせつない人です。

(六才・女)

都会の子どもたちは、バスや電車にのる機会が多い。偶然的で無選択な人間接触の機会ではあるが、そこからもプラス・マイナスささまざまな人間的影響をうけている。

ぼくがバスからおりたとき、小さい男の子がバスの出口のところで、おりられなくなつたので、しゃしょさんのが、小さい男の子をおろしてやりました。ぼくは車しようさんはえらいな、またたいへんだなと思いました。

(八才・男)

吉じょうじのえきで、三人でなぐりあいのけんかをしていました。ぼくとおかあさんと、とおいところからみていました。ぼくはへんな人だと思いました。ぼくはとちゅうからきたのでわけはよくわからなかった。ぼくのところはだんだんおそろしくなつきました。の人たちはこころのわるい人です。ぼくはそういうふうに思いました。よくないことです。

(八才・男)

うちのだいどころの外にゴミをするカンがあります。ネコがそれをひっくりかえしました。そのとき、マアちゃんのおばさんが、そのくさいゴミをはいてかたづけてくれました。

(六才・男)

心美しい人たちの住む地域に居住しあわせた子どもたちは幸運である。よい人間の住む、よい地域を育ちざかりの子の環境として与えうるように努力したいものである。こうなると、単に一家庭ないしは少數有識者の熱意やほねおりだけでは解決のつかぬ問題である。

広い範囲の、多数の人たちの深い理解と協力をまたねばならない。

子どもという次代人を、満足に育成することは、単にその子の両親だけ、家族だけの仕事ではなく、また先生や学校だけの働きでも

なく、もっと広く、もっと多くの人たちの全部に課された、困難でそして根気のいる大仕事であることを、つくづく思うわけである。

ぼくがいのがしらこうえんをあるいていたら、男の人がちらかっているかみくずを、あつめて、ごみすてばにしていました。ぼくはかんしんな人だなとおもいました。（六才・男）

きちじょうじにくとき、みちに男の人かけしてないたばこをすてていった。よくない人だとおもった。（六才・男）

このように公共施設や社会公衆の場面での一般人の行為も、批判的に適正にとらえられている。そこで私たちは、子どもたちに礼賛され尊敬されるような愛隣行動を切に期待するのである。

人ととの間に信頼関係を形づくるのがプラス行動である。これ

は友愛と相互理解にもとづく陽性行為である。

これに反して、背信や憎悪や敵視や攻撃や侮辱や抹殺や疎外排斥など、あらゆるマイナス行為は不信関係を増大する。この場合、人間

同志の陰性関係におし流されおぼれて人間は不良化・悪化し、犯罪化の現象が生ずる。ところで人間は、不信行為に見まわれた場合、すべてが不良化・悪化するわけではない。不信関係を批判することによって、逆にいつそう強い正義心が動きだし、倫理にあこがれ、良心の働きにめざめることがある。こういう不信に対する反発姿勢を子どもに育てておくことは、社会的な汚物を絶滅し得ない現実の生活にお

いて、重要な手法である。不良文化や不良環境におしひしがれない強い知恵を育てる工夫と努力を、われ人ともに持とうではないか。

八月二十九日ごろ、ぼくがかいものにいきました。くだものやさんで、おじさんからコーヒーをもらいました。うちにかえつてのもうとしました。そしたら白いものがまじっているのです。それはカビでした。ぼくはあのおじさんが、たいていほかのはいいんだけど、あんなのくれてわるいな、とおもいました。

。マイナス（七才・男）

十二月ごろ、きんじょのアパートの人がぼくのうちの方にゴミを毎日するので、そうじばかりしてたいへんです。いく日かしてちゅういをしました。そしたらやっとやめました。ぼくはいやなことだと思いました。

。マイナス（七才・男）

あたしが二さいのとき、上水のところで一人であそんでいた上水におちそうになった。そのときがいこく人がたすけてくれました。とてもうれしかった。

。プラス（六才・女）

私は、人間の善意について注意すべき点は、行為の質であり、人間同志の接觸関係の在りようだと思う。そういう意味あいにおいて、コトバを通しての感動や、隣人への感謝といったことがらが、重要視されねばならないのだと思う。

人間の善意行動における質的な高まりと、充実した高度な人間接触の拡大・日常化を祈念してやまない。

（明星学園）